

日本語における書字障害の背景、機序に関する研究

柳生一自(北海道医療大学 心理科学学部 教授)

【全体の背景と目的】

近年、子どもの読み書きの障害について注目が高まっており評価を行うことが可能になってきた。日本語の読み書き困難評価に対して各種の検査を組み合わせることで評価されることが多いが、定まったバッテリー検査はない。とくに**書字表出は「読み書き」における最終段階でのアウトプット**と考えられ、書字障害はその**背景に様々な要因**が存在する。書字に至るには音韻認識を含めた読み能力だけではなく、視知覚による文字形態認知や微細運動といった周辺領域の認知運動機能を要し、注意集中も求められる。臨床現場で確立された評価フローはなく、障害状況の過大過小な評価につながる恐れがある。本研究では、より適切な読み書き困難の評価方法について検討し、合理的な評価や支援のあり方について複数の研究を進めた。

【方法】北海道大学病院精神科神経科児童部門および札幌市子ども心身医療センター児童精神科を受診した症例で「特異的発達障害診断・治療のためのガイドライン」の「読み書きの症状チェック表」で読字か書字項目の5項目以上陽性となった症例を対象とした。対象症例は各研究の解析時期によって異なるが、総数は小学1年生から高校2年生までの61例(男48、女13、学年の中央値6年、平均5.6年)。評価項目として保護者への質問紙として不注意、多動・衝動性の指標となるADHD-RSIV、運動の指標となるDCDC(Hashimoto 2020)、自閉性の指標としてのPARS-TRおよび読み書きの症状チェック表の読字項目、書字項目を取り入れた。本人への対面検査としては、微細神経兆候(Soft neurological sign)を行い(柏木 2009)、協調運動の困難の指標とした。知的機能の指標はWISC-IV、学習習得の指標としてK-ABC IIの習得尺度項目を用いた。音読、流暢性指標として音読検査の読み時間を用いた(稲垣 2010)。別の読み書き指標としてSTRAW-Rの読みのカタカナ・漢字単語、漢字126字、文章、ひらがな、カタカナの単語書字を用いた。中学生以降は小学6年生の課題、基準値を用いた。視覚認知指標としてWAVESを用いた。これらデータをもとに以下のような解析結果を得た。

【研究結果概要】

読み困難のアセスメント方法について—KABC-IIと音読検査の比較検討 渡邊由季(北海道大学医療技術部)

読み困難の評価や限局性学習症診断には、総合的な学習の習得度や達成度を評価するKABC-IIの習得尺度を用いることが多い。しかしKABC-IIでは文字—音韻の変換能力を直接的に計測していない。このため実際の音読能力と検査結果との乖離が生じる恐れがある。本研究ではKABC-IIの読み尺度で $-2SD$ を超えない者であっても読み検査課題における音読の所要時間の遅延が多く認められ、特に単音では16/43名、無意味語では24/43名が、学年平均の $+2SD$ を超えた音読の所要時間であることが認められた。読み困難をもつ子どもの評価においては、個人の困難を適切にアセスメントするためのバッテリー検査が必要である。

漢字書字困難に至る背景因子の検討 柳生一自(北海道大学病院児童思春期精神医学研究部門)

研究1では漢字書字困難の背景因子が、読字障害の有無により異なる可能性が示された。読字障害群は漢字以外の書字や、漢字の音読が、漢字書字困難に結びつくと考えられた。一方、非読字障害群ではK-ABC II文の理解と負の相関を認め「読めるのに書けない」という個人内乖離の可能性が示唆された。研究2では読み書きの困難をもつ児童をグループ化することを目指した。検査項目へのクラスター分析、ついでクラスター代表項目を用いた症例のグループ化を行ない、書きと協調運動の困難があり読み正常群、書きが苦手ではあるが軽症な群、読み、書きとも苦手な群、不注意・多動衝動性が強く、書きの苦手な群に分けられた。読み書き困難児の背景は多様であり、本人の特性に応じた支援が必要である。

書字障害の背景にある、協調運動、目と手の協応、視覚認知の困難さ**末田慶太郎(札幌市子ども心身医療センター児童精神科)**

書字障害のある児童の微細神経学的徴候、協調運動の困難さ、視知覚、目と手の協応等の視覚関連スキルに焦点をあてて調査し、さらに読字障害を伴う群(書字障害+読字障害)と読字障害を伴わない群(書字障害のみ)を比較した。書字障害の背景には、協調運動の困難さ、視覚記憶、目と手の協応、視覚的注意と眼球運動の視覚関連スキルの弱さを背景とする児童がいることが明らかとなった。書字の困難さを認める児童を評価する際には、これらの能力を評価する必要があり、協調運動の困難さの評価としてDCDCが、視覚関連スキルの評価として奥村ら(2014)が開発したWAVESは有用な評価ツールとなると考えられた。